

講師 寺地五一さん

ケネディとカストロが探った和解への道

『ジョン・F・ケネディはなぜ死んだのか？ 語り得ないものとの闘い』から読み解く

報告 河内茂幸（キューバ友好円卓会議事務局）

写真撮影 川島幹之

桜が開花し始めた去る3月29日（日）、『「ジョン・F・ケネディはなぜ死んだのか？ 語り得ないものとの闘い（ジェームズ・W・ダグラス 著 同時代社）」から読み解く』と題して、原作訳者の寺地五一さんによる講演が中目黒スクエアにて行われました。寺地さんのお話は、ケネディが暗殺されるに至った理由や背景の核心を時代を超えてありありと伝え、人類共存のためにケネディがどこまでも追求しようとした「対話による平和主義」の持つ普遍的価値を本当に深く感じさせるものがありました。さらに、事実の積み重ねによって真実へと迫ることの重要性をあらためて彷彿させられました。お話の内容を報告します。

平和追求への転向

米ソ両陣営の冷戦構造の中で力による国家安全保障を最優先させようとする当時の米国軍産複合体・CIAの強大な圧力に苦悩しながらも、ケネディが平和追求へと転向した決定的な契機は、キューバミサイル危機を敵対国のニキータ・フルシチョフとの対話によって回避したことの中にあった。

1962年10月、米国のU-2型偵察機がキューバの空撮を行い、ソ連がキューバに建設していたミサイル基地を発見したことから、キューバミサイル危機が発生。米国とソ連による核戦争の脅威が世界を震撼させたが、ケネディはフルシチョフに働きかけ、キューバに侵攻を約束し、フルシチョフは、キューバのミサイルを直ちに撤去することを約束した。ケネディは、ソ連という当時の敵国との対話によって危機を乗り越えたことで、その後さらなる平和戦略に進んでいった。

1963年6月10日にアメリカン大学で行った演説の中でケネディは、ソ連との平和共存のための努力の大切さを訴え、部分的核実験禁止条約を締結する構想を発表した（2か月後に批准された）。その演説内容は、米国政府・メディアの冷やかな反応とは異なり、ソ連国民には大きく支持された。同年9月末には、ケネディのフルシチョフとのコミュニケーションを終わらせようとする米国国務省に抗い、軍縮についての話し合いをソ連と（秘密裏に）進めたいという希望をフルシチョフに伝えた。そして、その目的のために、ソ連の指導者と秘密の通信回路をふたたび開こうとした。1963年10月11日には、国家安全保障行動覚書で、1965年末までにベトナムからすべての米軍関係者を撤退させることを決定した（1964年の大統領選挙でケネディが再選されないと表向きにできない性格の決定ではあったが）。

キューバとの関係改善

1962年秋、ケネディ大統領と弟のロバート・ケネディ司法長官は、ニューヨークの弁護士ドノバンをキューバに派遣し、ピッグス湾侵襲事件（カストロ革命政権を転



寺地五一さん

覆すべく、CIAが中南米で軍事訓練した在米亡命キューバ人傭兵によるキューバ侵襲（1961年4月）でキューバ側の捕虜になった在米亡命キューバ人の釈放交渉にあたらせた。

その結果、米国からの6100万ドル相当の医薬品や食料品との交換で、1500人の捕虜は、1962年12月のクリスマスまでに全員が釈放された。ピッグス湾侵襲では、傭兵のキューバ上陸後米軍が支援するという作戦をケネディは支持しなかった。ケネディは侵襲失敗の責任を認めたが、CIAに対しては軍事行動の失敗を厳しく追及し、幹部をことごとく更迭した。

1963年4月ドノバンはキューバで再びカストロに会った。米国との関係改善を希望していたカストロはドノバンに対し、「米国との国交正常化のためにはどうすればよいか」と尋ねた。ドノバンは、「ヤマアラシの求愛と同じで慎重に進めることが肝要です」と答えたという。ドノバンとカストロのこうした良好な関係によって、米国とキューバの関係改善の流れが作られていった。（ケネディは、ドノバンのCIAとの密な関係を嫌い、カストロとの接触に向けたケネディによるその後の動きにドノバンが登場することはなかった。）

ドノバンの知り合いでアメリカABC放送の女性ジャーナリストであったリサ・ハワードは、ケネディの非公式な特使として1963年4月にキューバでカストロに面談した。カストロは、その面談においても、米国との関係改

善を望んでいることを明言した。リサ・ハワードは帰国後 CIA からの事情聴取に対し、カストロが米国との関係改善を希望していることを報告した。そして、ケネディ政権に対し、カストロの言い分を聞くべく、米国政府関係者を密使としてキューバに派遣すべきだと提言した。

元記者で外交官（駐ギニア大使）のウィリアム・アトウッドは、リサ・ハワードの報告を聞いて、自分がキューバとの窓口になってもいいという意向をケネディに伝えた。1963年9月23日、リサ・ハワードはウィリアム・アトウッドと協力して、ニューヨークの自宅でカクテル・パーティを装い、ウィリアム・アトウッドをカルロス・レチュガ（国連キューバ大使）に引き合わせ、両者の話し合いのきっかけを作った。

アトウッドはレチュガに、キューバに行ってカストロ首相に米国とキューバの関係改善の可能性を尋ねたい、と申し出た。レチュガは、ハバナでのカストロ首相との会談を設定できるかもしれないと答えた。アトウッドは、翌24日ワシントンでロバート・ケネディと会い、前日のレチュガとの話の内容を報告した。

ロバート・ケネディは、アトウッドがハバナに行くのはリスクが高すぎるので、カストロがキューバ以外の場所、たとえば国連で会うことに同意してくれる可能性をレチュガとさらに詰めてほしいと答えた。3日後、アトウッドは国連代表部ラウンジでレチュガと会い、自分が政府の人間としてキューバに行くのは難しいので、キューバ以外の都合のいいところでお会いして、私たちがお話を聞く用意がある、と申し出た。レチュガはその申し出をハバナに伝えると答えた。

しかし、ハバナから回答がないまま日数が経過したため、リサ・ハワードは、カストロの主治医で側近のレネ・バレホとの電話コンタクトを試みた。彼女は、レチュガのメッセージがキューバ外務省どまりになっているのではと思い、バレホを通して、米国政府関係者のカストロとの話し合いの意向をカストロ自身に伝えようとした。

10月29日、バレホからリサ・ハワードに電話があり、「米国から密使が来るのは歓迎だが、カストロがキューバを留守にして、国連あるいは別の場所に行くことは不可能だ」と伝えられた。10月31日、バレホからリサ・ハワードに再び電話があり、『カストロは「メキシコ」まで飛行機を出し、そこでその政府役人を乗せてバラデロ近くの個人所有の飛行場に運び、二人きりで話す用意がある。そうすればハバナ空港で見つかる心配はない』と語った。

バレホはその後もリサ・ハワードに数回電話し、カストロがケネディとの対話を進めたいと強く希望していることを伝えた。リサ・ハワードはカストロのそのような希望をアトウッドに報告し、アトウッドは、その報告内容をケネディの安全保障担当補佐官マクジョージ・バンディと国家安全保障委員会のゴードン・チェイスに話した。

語り得ないものとの闘い ジョン・F・ケネディはなぜ死んだのか



著者 ジェイムズ・W・ダグラス
寺地吾一／寺地正子 訳

定価 3700円＋税

発行 同時代社

TEL 03-3261-3149 FAX 03-3261-3237

「なぜ」FKの死が重要なのか？ この類まれな本を読んで、あなた自身の結論を出してください」オリバー・ストーン

「夜を徹して読んで、涙が止まりませんでした。一睡もしませんでした。いまずぐ立ち上がって、世界を変える力を与えてくれる本だと思います」オノ・ヨーコ

「すべてのアメリカ人にこの本を読んでもらいたい」ロバート・ケネディ・ジュニア

11月18日、リサ・ハワードはアトウッドにバレホへ電話させ（カストロも聞いていた）、バレホに「事前の話し合いのためにニューヨークに来ることができるか」と尋ねた。バレホは、カストロとの対話のアジェンダ（議題）を設定してレチュガに指示すると答えた。ケネディは、22日のダラス遊説から戻ってからできるだけ早くカストロとの対話の具体的な点を詰めようとしていた。

しかし、CIAはケネディとカストロを殺害する工作を進めていた。（ロバート・ケネディの代理人になりましたCIA特殊作戦要員が（CIAがとりこんだ）キューバ人の大物CIA秘密工作員にペン型毒殺器具（ボールペンの先に、刺されても気がつかないほど細い注射針が装着されたもの）を渡しカストロを暗殺しようとする企みを、カストロが事前に察知し、（カストロが）ケネディ暗殺を命じたような筋書きを（CIAが）作り上げ、結果としてロバート・ケネディが自分の兄の暗殺の引き金を引いた、という策略を、まさに実行しようとしていた。（「11月22日、ケネディ大統領が銃撃されたまさにその瞬間に、パリでそのペン型毒殺器具が渡されていた可能性が高い」）

ケネディは、リサ・ハワードやアトウッドを起用した動きの一方で、10月24日、フランス人ジャーナリストでアトウッドの旧友ジャン・ダニエルのインタビューを受けた。ケネディはダニエルをカストロへの非公式特使にしようとしていた。

ケネディはインタビューの中で、キューバの苦悩について、『すべてのアフリカの地域、植民地支配のもとにあるあらゆる国々を含めて、世界の中で、キューバほど経済的植民地支配、屈辱、収奪がひどい国はないと私は信じています。それはバティスタ政権時代のわが国の政策のせいでもある。フィデル・カストロは、シエラ・マエストラ山中の宣言で、当然ながら正義を求め、キューバからの腐敗一掃を特に願いましたが、私はそれを是認しました。私はもう一歩踏み込んで、バティスタが、ある程度は米国が犯した数多くの罪悪の化身であると考えます。私たちはその罪悪の代償を支払わねばなりません。バティスタ政権に関しては、私はキューバ史上最初の革命者たちと意見を同じくします。これは明白なことです』と語った。

しかし、ケネディは、『1962年に世界が核戦争の瀬戸際まで行ったのは、カストロのせいである』とも語り、カストロとの対立点も示した。

ケネディに会った後、ジャン・ダニエルはカストロにインタビューすべくキューバに行ったが、11月の最初の3週間、カストロに会えなかった。しかし、ハバナを出発する予定日前日の11月19日の夜に、ダニエルが滞在していたホテルにカストロがひょっこり現れた。

カストロはケネディのことを聞きたがった。ダニエルは、ケネディから託されたメッセージを伝えたが、カストロは、ケネディがバティスタ政権を批判した言葉や、最後にケネディが全人類に致命的な戦争を引き起こす寸前まで行ったとしてフィデルを非難した言葉については三度繰り返させた。ダニエルは話し終えて、相手の反応を待った。

カストロは長い間黙っていたが、「私はケネディが誠実な男であると信じている」と切り出し、ケネディが置かれている難しい状況にも理解を示した。しかし、ミサイル危機で人類を核戦争の淵まで追いやった最大の責任がカストロにあるというケネディの非難には次のように激しく反論した。

『ミサイル基地がキューバに設置される6か月前に、CIAのあと押しでキューバへの新たな侵攻が計画されつつあると警告する多くの情報が我々に寄せられた。……その後、フルシチョフの娘婿のアジュベイがケネディの側近たちの招きでワ



シントンへ行きケネディと会談したが、話題はキューバに集中した。アジュベイにケネディが何を言ったかよく聞いてほしい。なぜなら、とても重要なことだからだ。

ケネディは、キューバの新しい事態は米国にとって許しがたいことであり、米国政府はこれ以上容認できないとの結論に達していると言ったのだ。キューバへのソ連の影響が勢力のバランスを崩し、合意された均衡を破壊しつつある。……米国はハンガリーに介入しなかったと言って、ロシア側に釘をさした。これは明らかに、侵略が起きてソ連は介入するなという要求である。……ソ連は二つの選択肢をつきつけられていた。キューバ革命が攻撃された場合の（社会主義圏でのロシアの責任と立場の故に）絶対的に回避できない戦争、もう一つは米国がミサイルを前にしても後退することを拒み、キューバを崩壊させる試みを止めない場合の戦争リスクである。ロシアは社会主義国の連帯と戦争のリスクを選んだのだ。……要するに、そのとき、我々はミサイル配備に同意したのだ。……しかし、我々は世界平和を賭していたわけではない。革命を押し進めるために戦争という脅かしを使って、人類の平和を危うくしていたのは米国だ』

ケネディに対するカストロの見方は変わりつつあった。ケネディは話せる相手であると思うようになり、1964年に大統領に再選されれば、その4年間を加えこれから6年間の猶予があるのだから、ケネディと話したいと考えていた。しかし、ケネディとの対話実現に向かっての最終プロセスともいえるほど重要な局面で、ケネディは暗殺されてしまった。

1963年11月22日の午後、ジャン・ダニエルがバラデロビーチのカストロの夏の別荘で、カストロと昼食をとっていた時に、二人はケネディ暗殺の知らせを受けた。カストロはその瞬間ダニエルに、「なにもかもが変わった。これですべてが変わってしまう」という言葉を発した。

世界核戦争回避への道

ケネディとフルシチョフは、1961年6月の両者のウィーン会談の後再び会うことはなかったが、両者間の個人的な書簡（21の秘密の書簡）のやりとりによって接触が続けられていた。二人の書簡のやりとりは、「あなたと

私と関係はノアの方舟であり、絶対に沈ませてはならない」というフルシチョフからの書簡に始まり、ケネディも、そのようなフルシチョフの趣旨に賛同した。そうした書簡のやりとりは両者間のバックチャンネルとなり、密接な関係が続いていた。

そうしたなかで、キューバミサイル危機が発生。1962年10月14日にアメリカ空軍のU-2偵察機がキューバの空撮を行い、ソ連が建設中のミサイル基地を発見。ケネディは、ミサイル基地への空爆を主張する国防総省やCIAの強硬論を抑えて、キューバ周辺の公海上の海上封鎖およびソ連船への臨検を行うことでソ連船の入港を阻止しようとした。

10月27日には、核魚雷を搭載したソ連の潜水艦を追尾していた米艦隊がソ連潜水艦を浮上させようとして（その潜水艦が核魚雷を搭載しているかどうかも知らずに）爆雷を投下した。

結局、ソ連潜水艦は降伏して海上に浮上したため、危機は回避されたが、仮に、ソ連潜水艦が核魚雷で反撃していたならば、核戦争へとつながったかもしれない。さらに同27日に、キューバ上空を偵察飛行していたアメリカ空軍のU-2偵察機が、キューバのソ連軍地対空ミサイルで撃墜された。

米エクスクム（国家安全保障会議執行委員会）は、ケネディにキューバミサイル基地への報復攻撃を勧告したが、ケネディは承認しなかった。米国ソ連の双方は、それぞれのミサイルの発射準備態勢に入った。核戦争の瀬戸際に追い詰められたケネディは、秘密裏にフルシチョフに救いを求めた。秘密の書簡交換を通してケネディへの信頼感を醸成させていたフルシチョフは、彼を助けようと決断した。

フルシチョフは10月26日、アメリカがキューバに侵攻しないならキューバの核ミサイルを撤去させるという書簡をケネディに提示していた。しかし、さらにフルシチョフは10月27日、トルコに配備されているアメリカのミサイルを撤去するよう要求した。瀬戸際に立たされたケネディが、その要求に対して選択したのは、アメリカがトルコに配備したミサイルを撤去するという譲歩であった。

そしてケネディは、その譲歩のソ連側への提示を秘密裏に行うべく、弟のロバート・ケネディ司法長官に駐米ソ連大使との秘密会談を持たせた。その秘密会談でロバート・ケネディは、キューバのミサイル基地撤去の確約が得られるなら、トルコのミサイルを撤去するという対案を提示した。

10月28日、フルシチョフはモスクワ放送でミサイル撤去の決定を発表。フルシチョフはケネディの条件を受け入れ、キューバに建設中だったミサイル基地やミサイルを解体・撤去し、ケネディもフルシチョフの一番目の要求（アメリカのキューバ不可侵）を受け入れ、キューバへの武力侵攻はしないことを約束した。

トルコに配備されていたアメリカのミサイルは翌1963年に撤去された。このように、核戦争回避の道は、ケネディとフルシチョフによって作られた。世界核戦争の切迫という危機的な状況にありながらも対話を放棄しな

ったケネディとフルシチョフによって、核戦争回避の道が作られたのである。

キューバ危機とカストロ

カストロは、ソ連がキューバに何の相談もなく核ミサイルを撤去したことに激怒した。これに対してフルシチョフは、危機後の1963年1月の書簡で、カストロをソ連に招待したいと申し出た。カストロは1963年5月から6月初旬にかけてソ連に滞在し、滞在期間の少なくとも半分をフルシチョフとともに過ごした。

フルシチョフはケネディからの多くの書簡（なかにはロバート・ケネディからのものもあった）をカストロに読んで聞かせた。フルシチョフは、ケネディと共に全面戦争の瀬戸際から学んだ逆説的な平和への目覚めをカストロに伝えようとしていたのである。カストロは、ケネディと交渉しようと決意を固めてハバナに戻った。

CIAは、カストロ、フルシチョフ両首脳をはじめすべての当事者の動きを監視していた。（1966年にCIA長官になる）リチャード・ヘルムズは同僚に宛てた極秘メモで、カストロはケネディ政権に対して「当面は」融和政策をとるという意向を固めて、キューバへの帰路にあるという報告をCIAは受け取ったところだ、と述べている。

「平和はプロセスである」

アメリカ軍は、ソ連に対する先制核攻撃計画を1957年にスタートさせた。軍の好戦派は、先制核攻撃に必要なICBMを準備できるのは1963年の終わりだと推測して、計画を推進しようとしたが、ケネディはこの計画に強硬に反対した。国家安全保障会議（NSC）小委員会は、冷戦中の1957～1963年に、核戦争の想定被害に関する年次機密報告書を作成していた。ケネディは、1961年の大統領就任後初めて受け取った報告書の内容（ソ連の先制攻撃と米側の報復により米・ソ・中それぞれの国において数千万人の死者が出るという予想）に、「それでもわれわれは自らを人類と呼ぶのだろうか」と嘆いた。

ケネディは、第三世界の民族自決運動に理解を示し、たとえば、コンゴをベルギーからの独立（1960年）に導いたルムンバ（1961年殺害された）を支持した。1963年6月10日に行ったアメリカン大学の演説の中でも、「他国の自決を干渉する国がなくなれば、平和は今よりもはるかに保障されることになるでしょう」と語っている。また、同演説で、「…嫌がる人たちに、私たちの体制を押しつけるつもりはありませんが、私たちは地球上のいかなる人たちとも平和を目指し競争を行う用意がありますし、行うことができます」と語っているように、敵対国の体制をくずしてまで敵対するつもりはないという考えを持っていた。

ケネディのこうした平和志向は、「真の平和は、多くの国によって生み出され多くの行動を積み重ねたもので

なければなりません。そうした平和は固定されたものではなく、新たな世代が生まれるたびに、その世代の課題に応じて変わっていくものでなければなりません、なぜなら、平和とはプロセスであり、課題を解決するための一つの方法だからです」という、同演説での言葉に収斂されている。

エピソード

ケネディは、彼の敵（つまり米国の敵）との和平に向かったために、「語り得ないもの」として存在する権力によって殺害されました。「語り得ないもの」は、政府や権力のように外部の闇の中にだけ存在するものではありません。私たちの中にも存在します。

ケネディ暗殺に至るまでに、そのことを示すいくつかの先例がありました。米国政府が（ドレスデン、広島、長崎などの）都市を壊滅させたとき、米国市民はその政府を支持しました。

「語り得ないもの」は遠い存在ではないのです。私たち市民による否認が、「妥当な否認根拠」という政府の原則の根拠になっています。

それでも、しかし、「語り得ないもの」を包む闇を覆すのも市民の力です。

『私たちができるだけ深く闇の中に入り込めば、結果はどうあれ、真夜中の真実が私たちを暴力への隷属から平和の光へと解放してくれると私は信じる』

— ジム・ダグラス

2015年9月8日～9日 於：ベトナム・ハノイ

第7回 キューバ連帯アジア太平洋地域大会 参加募集のお知らせ

第7回キューバアジア太平洋地域大会はベトナム社会主義共和国にて、2015年9月8日～9日まで首都ハノイで開催されます。大会では国家間の友好と連帯強化のために、さらなる活動が行われる予定です。

当イベントは、キューバ諸国民友好協会（ICAP）設立55周年ならびにベトナム独立宣言70周年の年に開催されます。

本大会は間違いなく、キューバとベトナムの優れた友好関係の新たな模範となるでしょう。敬愛するホーチミン大統領の祖国から、アジア太平洋地域のキューバへの連帯運動強化のための前進となるこの重要な大会に、私たちはすべてのキューバの友人を招待します。あなたの参加を楽しみに待っています。

参加を希望される方は当大使館までご連絡ください。

費用はUSD250です。含まれるものは、大会参加費、2日間の会場移動費とツインの宿泊費です。

ご不明点がございましたら、大使館でもご質問を承ります。

キューバ共和国大使館 友好・政務部（森）

Tel: 03-5570-3182 Fax: 03-5570-8521 E-mail:
tcultura@ecu-japan.jp

7回目を迎えました♪

佐久総合病院「病院祭のお絵かきコーナー」 出町千鶴子（画家／キューバ友好円卓会議事務局）

2008年、アレイダ・ゲバラさんが初来日。彼女のたったの希望が「日本の伝統医療の視察」でした。この時、アレイダさんに同行して長野県の佐久総合病院を訪問しました。

このことがきっかけで、翌2009年から病院祭のイベントの一つとして始まったこども館（小児科）の「お絵かきコーナー」は、今年で7回目を迎えました。

今年も開始前から大勢の子どもたちが集まっていました。子どもたちは手に手に筆を持って、早く描きたい気持ちでもじもじうずうずしています。



ひらかず君は、毎年参加してくれる常連さん。7年前はお父さんの膝の中で、絵筆を持つ手をお父さんに持ってもらって描いていましたが、今では私の大切な顧問的存在。画伯と呼んでいます。私が青い鳥を描くと、画伯は赤い実の一枝を描いてくれました。常連さんの成長を見るのも、このお絵かきコーナーの大きな楽しみの一つです。

今年のテーマは「こどもの心」。私の「みんなが、いま一番描きたいものを描いちゃおうか」の声で、一斉に描き始め、30分とかからず一気に描き上げた大作です。如何でしょうか。

病院祭は、毎年5月第3土・日曜日に開催されています。今から、来年が楽しみです。